

よこせやう 横瀬夜雨

つくばね
筑波嶺(根) 詩人 下妻市



(下妻市ふるさと博物館蔵)

明治11年(1878) - 昭和9年(1934)。真壁郡横根村〔下妻市〕生まれ。本名は虎壽。3歳の時にくる病という脊椎の病気になる。東京で治療を受け、命は助かったが背骨は曲がったままになる。自宅で療養後、8歳で大宝尋常小学校に入学。小学校卒業後、自宅で独学に励む。17歳から文芸誌『少年文庫』(後の『文庫』)に投稿。「神も仏も」で注目される。明治31年(1898)、民謡調の代表作「お才」を発表し、筑波嶺(根)詩人としての名声を得る。詩集『夕月』『花守』『二十八宿』を刊行。同41年(1908)に女性文芸誌『女子文壇』の選者となる。大正元年(1912)ごろから、いはらき新聞の歌欄「木星」を主宰。童謡や民謡、書や随筆など幅広く活躍する。

横瀬夜雨は、真壁郡横根村〔下妻市〕の旧家横瀬家の二男として生まれました。生まれつき体の丈夫でなかった夜雨でしたが、3歳の時くる病というたいへん重いせきついの病にかかってしまいました。東京の病院で治療を受けましたが、命は助かったものの、背骨は曲がったままになってしまいました。このことは夜雨をずっと苦しめることになりました。

その後、地元の尋常小学校に2年おくれて入学しましたが、成績は抜群で、特に作文と図画にすぐれていました。しかし、学校生活は、夜雨にとってあまり楽しいものではありませんでした。それは、夜雨の姿をからかう人たちの言葉などから、つらい思いをすることが多くあったからです。尋常小学校を卒業すると、進学せず、祖父の集めたたくさんのお本や、姉の唱歌の本を友として生活するようになりました。その中で、和歌とも漢詩ともちがう新しい詩というものを知るようになりました。

(よし、これなら自分を、もっともっと知ってもらえるはずだ。) こう考えた夜雨は、当時刊行されていた投書雑誌『少年文庫』(後の『文庫』)へ詩の投稿をはじめました。明治28年(1895)に発表した「神も仏も」は、『文庫』の記者であった河井醉茗たちに認められ、夜雨の代表作となりました。その後、多くの詩の友だちから心からのなぐさめや励ましを受け、ようやく生きがいを知り、詩一筋に打ち込んでいくことになりました。

夜雨は、自分の生まれた筑波の自然や歴史などと深く結びついた詩をたくさん作りました。自分の悲しい運命、友だちへの思い、女性へのあこがれなどを、筑波山や大宝沼に込めてうたっているのです。万葉集や民謡などを詩の中に取り入れる研究もしました。その試みから生ま



横瀬夜雨の生家(下妻市ふるさと博物館提供)

れたのが、明治31年(1898)の民謡調の代表作「お才^{さい}」です。この頃から夜雨は「筑波嶺(根)詩人」の名で呼ばれるようになりました。

女男居てさへ 筑波の山に 霧がかかれば 寂しいもの
佐渡の小島の 夕浪千鳥 弥彦の風の 寒からん
越後出てから 常陸まで 泣きにはるばる 来はせねど
お月様さへ 十三七 お父恋ふるが 無理かえな … (後略)

この詩は、越後(新潟県)から夜雨の家に働きに来ていた少女をモデルにしたといわれ、親元から遠く離れた少女の悲しい心情がよく表れています。詩には、節と踊りがつけられ、地元の東部中学校で現在も踊られています。

明治38年(1905)、第二詩集『花守』を出し、詩人としては有名になりましたが、このころから病気が重くなり、ほとんど歩けなくなってしまいました。

明治41年(1908)から女性文芸誌『女子文壇』の選者となり、大正2年(1913)ごろからは、いはらき新聞の歌欄「木星」を主宰<中心になってとりまとめること>し、多くの後輩を指導し、若い歌人を世に送り出しました。その一方で、家で塾を開き、村の青年に勉強を教えたり、地域の文化の発展にも尽くしました。

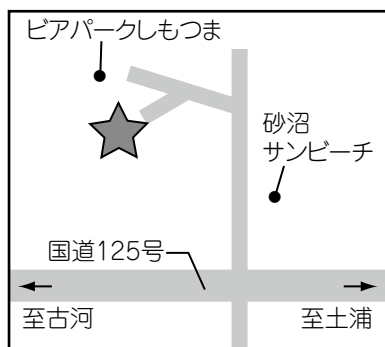
大正6年(1917)に結婚し、三女にも恵まれ、愛情につつまれ幸せな生活を送っていました。しかし、かわいがっていた長女が急死した翌年、まるでその後を追うかのように、昭和9年(1934)に亡くなりました。

ゆかりのスポットに行ってみよう

下妻市ふるさと博物館

所在地 下妻市長塚乙77

内容 博物館内に横瀬夜雨記念室があり、遺品や関係する資料が展示されています。



おもな 参考文献

『横瀬夜雨 生涯と文学』(横瀬隆雄・横瀬夜雨研究会・1966)

『郷土の先人に学ぶ』(茨城県教育委員会・1986)